

令和 7 年 6 月 4 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2024

課題番号：22K13090

研究課題名（和文）中・近世ヨーロッパにおける悪魔学作品と社会との相互的影響関係に関する学際的研究

研究課題名（英文）An interdisciplinary study of the reciprocal influences between demonological works and society in medieval and early modern Europe.

研究代表者

田島 篤史 (Tajima, Atsushi)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：40802765

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来、歴史学の研究対象であった悪魔・悪霊・魔女・魔術に関する包括的知識体系である悪魔学に基づいて書かれた作品について、新たに文学研究の対象としての可能性を示すものである。具体的には、悪魔学の最重要作品で魔女迫害を激化させたとされる『魔女への鉄槌』（初版1486年）を取りあげ、その「作者」および当時の社会との相互的影響関係に着目し、実証史的な手法とともに文学の批評理論を用いて分析することで、悪魔学研究を文学と歴史学の両分野に属する学際領域と位置づけ、文学と歴史学にまたがる方法論により、両分野を架橋する試みである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究計画に基づき公表された成果、とりわけ最終年度に出版された『魔女を糾す 中・近世ドイツの法実践と悪魔学』（森と出版、2025年）では、『魔女への鉄槌』に限らず、他のいくつもの悪魔学作品が実際の魔女裁判に際して、いかなる影響を与えていたのかを、魔女裁判関連史料、とりわけ法鑑定書の分析に基づき実証的に論じている。魔女に関して鑑定活動と法学というレベルに注力した研究はこれまでにないもので、裁判という社会的営みと悪魔学作品との直接的影響関係について論じている世界初の試みである。

研究成果の概要（英文）：This study demonstrates the potential of works written on the basis of demonology, a comprehensive body of knowledge about devil, demons, witches, and witchcraft that has traditionally been the subject of historical studies, as a new object of literary study. Specifically, I will focus on "The Hammer of Witches" (first published in 1486), the most important work in demonology, which is said to have intensified the persecution of witches, and analyze it using critical literary theory as well as empirical historical methods, focusing on its "author" and his mutual influence with the society of the time, thus bringing demonology research into both the fields of literature and history. This is an attempt to position demonology as an interdisciplinary field that belongs to both literature and history, and to bridge the two fields through a methodology that straddles literature and history.

研究分野：ヨーロッパ文学関連

キーワード：魔女 悪魔学 聖人 聖母 巡礼

1. 研究開始当初の背景

本研究における主たる分析対象の一つ『魔女への鉄槌』は、ドミニコ会に属する二人の異端審問官ヘンリクス・インスティトリスとヤーコプ・シュプレンガーの手になるとされる悪魔学作品であり、初の体系的魔女論として注目されてきた。魔女・魔術は古今東西みられる人類普遍の現象である。しかし、それに関する学術理論の急激な発展と衰退は、中・近世ヨーロッパ＝キリスト教世界にのみ認められる特徴である。すなわち、悪魔学という知識体系自体が、強く歴史性を帯びた事象なのである。そのため悪魔学は、これまで主に歴史研究の対象とされてきた。『鉄槌』研究の嚆矢とされるのも、歴史家ヨーゼフ・ハンゼンによる一連の仕事である。ハンゼンは、古代から17世紀末までの各時代の魔術関連テキストとの比較分析的な視点をもって『鉄槌』を論じた。またインスティトリスおよびシュプレンガーに関する史料を収集し、彼ら2名を作者として同定するとともに、その生涯を再構成した。ハンゼンによって『鉄槌』は、魔女研究の中で重要な位置を占めるに至ったのであり、彼の主張は120年以上経った現在も、概ね通説として受け入れられている [Joseph Hansen, *Zauberwahn, Inquisition und Hexenprozess im Mittelalter und die Entstehung der großen Hexenverfolgung*, München 1900; *Quellen und Untersuchungen zur Geschichte des Hexenwahns*, Bonn 1901]。

ハンゼン以降の『鉄槌』研究も、基本的には歴史家によって為されてきた。しかし悪魔学というジャンルに属するテキストは、神学・法学・神話・聖人伝といった種々の言説群からなっており、これらは学問的言説と文学的言説の混合したテキスト、すなわち、文学・歴史学を架橋し、双方の射程に収まるテキストなのである。それにもかかわらず、歴史学における『鉄槌』研究では、これまで積みあげられてきた文学の批評理論が等閑視されてきた経緯がある。また文学における『鉄槌』研究では、単に魔女論が紹介されるに留まっている。こうした状況を踏まえて本研究では、従来の実証史学的手法に加え、批評理論を用いた考察によって、文学研究の対象として『鉄槌』の分析を進めていく。

2. 研究の目的

本研究の基底には、「書かれたもの」が社会に対していかに作用するか、また逆に様々な社会的存在・事象が作品の成立にいかに関わっているのか、という両者の相互的影響関係に関する問題意識がある。これは、あらゆる文化的営為はそれ自体独立して存在しているのではなく、作り手の置かれている社会的状況と密接に結びついているという認識に由来する。このことは悪魔学作品とその作者にも該当することである。

本研究の目的は、『鉄槌』の作者に焦点を当て、批評理論に基づき「作品」と「社会」との相互的影響関係を明らかにし、悪魔学における最重要作品とされる『鉄槌』の評価を刷新することである。これにより、文学的言説をも含む悪魔学作品が、文学における研究対象として認知され、本研究が今後の悪魔学研究の道標となることを目指す。

3. 研究の方法

文学における伝統的作品研究では、テキスト分析や作品の歴史的な位置づけのみならず、作品を生み出した作者個人の人生も重要とされてきた。しかし、ロラン・バルトが「作者の死」を提唱して以降、文学作品における作者とテキストとの連続性が否定され、「読者」と「読書」に関心が向けられ始めた。その一方で、ミシェル・フーコーは様々な言説群の作者名がもつ機能性に着目し、テキストを執筆した当人ではなく、「機能としての作者」(または「作者の機能」)を分析する必要性を説いた。また近年ノエル・キャロルは、芸術作品とは価値の創造者たる芸術家が意図的に作り出すものであると唱え、作品の位置する歴史的な文脈とカテゴリーの中で「作者の意図」に基づいて作品批評を行っている。こうした、いわゆる「作者の復権」が、様々な議論を引き起こしながらも、近年広く共有されてきている。上記の文学研究の潮流に鑑み、歴史研究の一分野とされてきた悪魔学研究においても、「作者」に光を当てた再検討が必要だと認識した。そこで従来から行われてきた『鉄槌』におけるテキスト分析に加えて、『鉄槌』の作者の活動を再構成するとともに、他の関連作品にも着目しつつ、それらのテキストが実際の魔女裁判の中にいかに表れているかという観点から、上記の批評理論に加えて実証史学的手法を用いて、作品と社会との相互的影響関係を明らかにする。

4. 研究成果

当初は、研究蓄積のあるインスティトリスよりも、ほとんど研究が為されていないシュプレンガーに注力して、彼の活動の再構成からはじめていた。その際、1475年にシュプレンガーが設立したロザリオ信心会について調査していたところ、先行研究で聖母崇敬者と指摘されていたインスティトリス以上の聖母崇敬者としてのシュプレンガーの一面が明らかになった。そのため同時代の聖母崇敬の中にシュプレンガーの活動を位置づけようと試みたところ、ドイツ語圏における聖母崇敬は、上記の信心会活動だけでなく、各地で行われる「巡礼」と不可分であることがわかり、巡礼も調査・研究対象に含めることとなった。各地の聖母巡礼地を調査するに

あたり、比較考察のため調査した他の諸聖人の巡礼地についても取りあげてまとめた論考が、以下の3本である。

- ・「ドイツ語圏の巡礼 アイヒシュテットに眠る聖女とヴァルブルギスの夜」『月刊へんろ』(2022年)
- ・「聖ヴォルフガング巡礼 伝説と史実のはざままで」『隔月インタビュー』(2023年)
- ・「ザンマライの聖母」『隔月インタビュー』(2024年)

これらの成果は、各巡礼地での現地調査を踏まえて為されており、すなわち民俗学的手法もとられていることから、当初の研究計画にあった「文学と歴史学の架橋」という学際研究の範囲がより広がったことを意味する。とりわけ「ザンマライの聖母」においては、巡礼者らの納めた奉納画を取り扱っており、従来は美術史において研究対象とされてきたものでもあり、より一層の学際性を示すことができた。これら3本の成果は加筆修正を加えた上で、以下の書籍に収録されて、出版された。

- ・『四国遍路と世界の巡礼 最新研究にふれる八十八話 (下)』(創風社出版、2025年)

奉納物の分析により、近世ドイツにおける聖母・聖人崇敬の実態の詳細が明らかになり、また奉納画の分析を進めていくと、聖母・聖人の起こす奇跡の数々が、悪魔学書や魔女裁判において刑罰対象とされていた魔術との類似性が明らかになった。それらの成果を国内外の学会・研究会等で報告したのが以下の業績である。

- ・Repräsentationen der Mobilität: Exvoto in den oberösterreichischen und niederbayerischen Wallfahrtskirchen(Spatial and Social Mobilities in the Medieval and Early Modern Alpine Regions、メンドリジオ、2023年)
- ・「巡礼、奉納物、モビリティー オーバーエースターライヒにおける聖ヴォルフガング崇敬」(第104回シュンポジオン、愛媛大学、2023年)
- ・Pilgrimage, Exvoto and Mobility: St. Wolfgang and his Veneration in Upper Austria (Spatial and Social Mobilities in the Medieval and Early Modern Alpine Regions、メンドリジオ、2024年)

上記はいずれも、研究計画を遂行していくうえで附随的に生まれた成果であるが、本来の研究計画にあった、悪魔学書と魔女裁判との相互的影響関係に関する成果としては以下のものがある。

- ・「15世紀ティロール伯領における魔女問題」(第72回日本西洋史学会大会 小シンポジウム2 モビリティーを生む「書物」: 中近世ヨーロッパ内境域アルプス世界の場合、オンライン、2022年)

本報告では、『鉄槌』のほか、ウルリヒ・モリトール『魔女および女予言者について』という同時期に上梓された悪魔学書も分析対象とし、ティロール伯領およびその周辺地域における悪魔学書の普及状況、さらには宮廷毒殺未遂事件および領邦内初の魔女裁判との相互的影響関係について論じた。

また最終年度には、小林繁子氏(新潟大学)、前田星氏(広島修道大学)、牟田和男氏(ザールラント大学)、梶原洋一氏(京都産業大学)を迎え、本研究課題の成果報告シンポジウムを開催した。田島は、インスティトーリスの活動地の一つであった帝国都市ニュルンベルクを対象に、当市における魔女・魔術裁判と『鉄槌』との相互的影響関係について、裁判関係史料、とりわけ鑑定書の分析を中心として実証的に論じた。それが以下の報告であり、その後、当該シンポジウムは同年度中に書籍化された。

- ・「帝国都市ニュルンベルクにおける魔女・魔術裁判にみる悪魔学的言説(シンポジウム「中・近世ヨーロッパにおける悪魔学作品と社会との相互的影響関係に関する学際的研究」、京都大学、関西中世史研究会との共催、2024年)
- ・『魔女を糾す 中・近世ドイツの法実践と悪魔学』(森と出版、2025年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田島篤史	4. 巻 2024年6月号
2. 論文標題 ザンマライの聖母	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 隔月インタビュー	6. 最初と最後の頁 8-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島篤史	4. 巻 463
2. 論文標題 ドイツ語圏の巡礼ーアイヒシュテットに眠る聖女とヴァルブルギスの夜ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊へんろ	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島篤史	4. 巻 2023年12月号
2. 論文標題 聖ヴォルフガング巡礼ー伝説と史実のはざまー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 隔月インタビュー	6. 最初と最後の頁 10-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 田島篤史
2. 発表標題 モビリティの諸表象ードイツ語圏の巡礼教会に奉納されたクス・ヴォートー
3. 学会等名 第104回シュンポジオン（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田島篤史
2. 発表標題 巡礼、奉納物、モビリティー オーバーエースターライヒにおける聖ヴォルフガング崇敬
3. 学会等名 アルプス史研究会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Atsushi Tajima
2. 発表標題 Pilgrimage, Exvoto and Mobility: St. Wolfgang and his Veneration in Upper Austria
3. 学会等名 International Conference: Spatial and Social Mobilities in the Medieval and Early Modern Alpine Regions（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田島篤史
2. 発表標題 15世紀ティロール伯領における魔女問題
3. 学会等名 第72回 日本西洋史学会大会 小シンポジウム2 モビリティーを生む「書物」：中近世ヨーロッパ内境域アルプス世界の場合
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Atsushi Tajima
2. 発表標題 Repraesentationen der Mobilitaet: Exvoto in den oberoesterreichischen und niederbayerischen Wallfahrtskirchen
3. 学会等名 Spatial and Social Mobilities in the Medieval and Early Modern Alpine Regions（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田島篤史
2. 発表標題 帝国都市ニュルンベルクにおける魔女・魔術裁判の鑑定書にみる悪魔学的言説
3. 学会等名 シンポジウム「中・近世ヨーロッパにおける悪魔学作品と社会との相互的影響関係に関する学際的研究」（関西中世史研究会との共催）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田島篤史（共著）	4. 発行年 2025年
2. 出版社 創風社出版	5. 総ページ数 226
3. 書名 四国遍路と世界の巡礼：最新研究にふれる八十八話（下）	

1. 著者名 田島篤史（共著）	4. 発行年 2025年
2. 出版社 森と出版	5. 総ページ数 93
3. 書名 魔女を糾す 中・近世ドイツの法実践と悪魔学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------